

<エッセイ>来る三〇年に期待する

著者	金 弼東
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	59-61
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006688

<エッセイ>来る三〇年に期待する

著者	金 弼東
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	59-61
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006688

来る三〇年に期待する

金 弼 東

世界の日本文化研究を先導してきた「国際日本文化研究センター」（日文研）が創立三〇周年を迎える。心からお祝いを申し上げたい。日文研は、一九八〇年代の前半に京都市の文化的な諸構想の内の一つとしてあげられた。日本精神の涵養とその国際化を通じて、「国際国家日本」を建設しようとした中曽根総理と、京都の著名な学者達の意見統合によって、日本文化を研究する総合的研究機関として一九八七年に旗をあげた。国家的次元で日本文化の総合的研究を通して、文字通り「大国日本」の民族・文化の優秀性を世界に発信しようとする、戦略的アプローチにより設立された代表的な機関である。要するに、「日本人のアイデンティティ」を確立し、そして国家意識や日本精神を涵養しようとした時代的イデオロギー状況と無関係ではなかった。

そのため日文研は、計画の当初から「大国化」を主導した中曽根総理の政治的意図と、地域の活性化をはかる地元京都の財界の意図、京都の文化首都化等をめざす京都の有力学者の意図との性急な合意の行く末を危惧する声も多かった。政治主導のもとに急ピッチで設立された日文研が、どこまで民主・自主・独立の精神を貫いて、日本文化研究に邁進できるかという批判であった。このような批判には多くの進歩的な学者や団体を含め、海外からも同じく批判的なスタンスで同調する動きも少なくなき、日文研の前途は必ずしも楽観的ではなかったといえよう。

だが、日文研は設立当時の「日本の国家主義の宣伝機関」というイメージを払拭し、時間が経つにつれ「研究センター」としての本領を発揮し始めた。基本的には「研究」「国際」の意味に忠実だったからである。同センターの建立に最初から深く関与し、初代所長まで務めた梅原猛氏は同センターの「国際」とは、「この機関が日本人ばかりか外国人の日本研究者も集い、共同研究をしたり情報を交換したりする研究所であるとともに、国際的にも通用する視点から日本を研究するという意味を含んでいる」と指摘した。国家主義の宣伝機関ではなく、日本研究の国際化を実現しているという主張である。

歴史的にみると、決して世界文明の中心とはいえない日本文化を、国内外の著名な研究者と「国際的に通用する視点」から日本研究を「共同」で行い、発信するという発想は、設立当時の視点で考えれば果敢な試みであった。設立されてから三〇年間、国際的・学際的な視野から日本研究者を育成してきたのではなく、日文研が招聘した世界各国の日本研究者の数（外国人研究員）も四〇〇余名に至っている。研究成果だけを概観しても、日本研究六九九件、日文研叢書四二九件、共同研究報告書五二三件、海外シンポジウム報告書四〇六件、国際研究集会報告書一四八〇件など、各分野で幅広い成果を蓄積している。日本文化を媒介とする知的交流の国際化の基盤が確実に固まったといえる。

日本研究を通じて世界的なネットワークが構築されている中、韓国からも、中国、アメリカについて多くの研究者が招かれ日本研究（個人研究、共同研究、各種のセミナーや研究会）に励んでいる。筆者も二〇〇八年度に招かれ各国の日本研究者と交流を深め、一年間の研究を足場に『戦後日本の文化外交研究』（二〇一四）を出版するなど、日本研究と絡んで今までも各種の支援を受けている。滞在中における細心の配慮には感謝の気持ちに堪えなかったが、特に印

象深かったのは、数百人の来場者が集まる学術講演会をはじめ、外国人研究者の研究成果が「日文研フォーラム」という形で市民たちに毎月披露されることであった。非常に新鮮でわくわくする経験であり、その経験は私が韓国へ戻って地域社会で「市民教養大学」の講座を開くきっかけにもなった。

その結果、同センターは世界的な日本研究センターとして多くの注目を浴びるようになり、文化交流の核ともいえる知的交流の確固たる土台構築にも成功した。小松和彦所長が触れているように「日本の文化・歴史を国際的な連携・協力の下で研究するとともに、外国の日本研究者を支援するという大切な使命」を貫いたからである。それだけではない。日本研究に必要な貴重な資料を収集、保存し、それを国内外の研究者に開放するシステムは、海外の日本研究のレベルアップを含め、日本研究の国際的拠点としての存在意義を一層高める役目を果たしている。

日文研が過去三〇年に及ぶ輝かしい役割と成果を基に、今後も、日本研究とそのシステムを発展的に築いていかれることを願ってやまない。日本国内の研究者及び関連機関との協力関係をより強化しながら、来る三〇年も、世界における日本研究の中核的機関として位置づけられることを、日本研究者の一人として心から期待し、声援を送りたい。

二〇一七年一月

(世明大学国際言語文化学部教授)